

仮題「都市空間の構想力」の解き起こし

西村教授単独会見「ベルクまちあるきその後」

北沢猛教授との新春対談（前号掲載）を終えた西村幸夫教授に、出張の飛行機発までのわずかな時間を頂いて、主として「ベルクまちあるき」プロジェクトその後についてお話をうかがった。（本誌坂内良明M1）

マガジン：今後の短期的な作業はどうなりますか？

西村：「資料集」をぜひ雑誌上で発表したい。班ごとのバラつきをあるていど統一してから。

マガジン：今後の当プロジェクトの目標はどのあたりに？

西村：件のまちあるきの「発展的拡大」。といっても、あの作業を絨毯爆撃的に他地域に広げていくわけではむろんない。仮題としては「都市空間の構想力」。スタティックな空間の読み取り・空間形成技法の解釈のみではなく、空間における時間の流れをさかのぼりながら、その土地・空間に内在する「構想力」を解き起こしていくダイナミックな作業を想定している。



■会見模様

■構想十年、満を持して始動

「都市空間の構想力」は西村教授が長年にわたって温め続けてきた「悲願」のプロジェクトであった。右のレジュメ（中島助手の提供）は、2000. 8. 15 の日付入り『都市空間構想力』出版計画。「コントラストを仕掛ける：驚きの美」「路傍の物語性：神が宿る細部」など、魅惑的な章立て案が並んでいる。



マガジン：もう少し具体的にいうと？

西村：たとえば、日本の典型的な都市空間をいくつかピックアップして、件の「まちあるき」様の作業をやってみる、とか。その中から何らかの原理を発見してゆく、という形だろうね。

マガジン：「ベルク」作業中、『日本の都市空間』と一緒にことをしているような気がする」という声もありました。

西村：たしかに『日本の都市空間』は優れた一つの到達点。ただ、あれはあくまで都市空間をスタティックに切り取る作業。めざしているのは、都市全体との関係を考えるなど、より幅広い視点から個別空間にアプローチすることだ。

マガジン：地図・写真・文献を使った都市空間の歴史的読み解き作業の方法論は、既におおむね確立されていますよね。

西村：方法論としては出尽くしている、と言うか、実際に使える材料が限られている。単に都市空間の歴史を現象的にひもとくのではなく、運動論的な視点を大事にしたい。まちに住む生活者が都市空間への関心を深め、まちづくりに関わるきっかけとなるような空間読み解き作法を提示したい。史跡めぐりやまち観光案内にとどまらない「タウン・トレイル」を確立させたい。これはヨーロッパでもまだ例が少ない。

マガジン：ダイナミックな「都市空間構想力」プロジェクトは、『都市保全計画』のような大著に結実するのでしょうか？

西村：ううん、大著は時間がかかるから（笑）。忘年会でも言ったが、「構想力」は独りではできないプロジェクトだ。若い皆のエネルギーをいかに発揮してもらうかに成否がかかっているね。



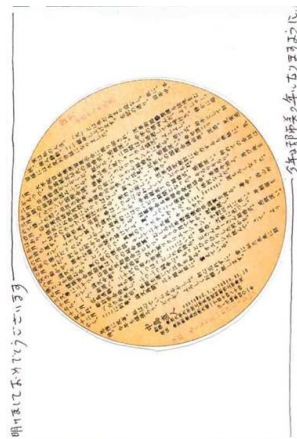
雪降る喜多方、ふれあい通り地区プラン提案

去る 2005 年 12 月 16 日、雪降る喜多方を訪問。今回は、福島県主催の「やさしい道づくりワークショップ」に参加し、夜のまちあるきを体験してきた。さらに、地元の方々に対し、市の中心部に位置する「ふれあい通り」の地区プランを提案、熱い議論を交わしてきた。（鈴木智香子）

(D1 永瀬節治、M1 柴田直 鈴木智香子 早坂勝一 鄭一止が参加)

←雪の夜の喜多方まちあるき体験

本誌公募さわやか年賀状、さわやか公開でみなさんおめでと！



左からそれぞれ、北沢教授、中島助手、野原助手、江口M1の年賀状

西村教授から研究室のみなさんへ 制度変革をどのように自分の将来設計の中で受け止めるか

研究室のみなさん新しい年が始まりました。このところ日本もいろいろな面で変化してきていることを実感しています。バブル以降の15年は「失われた年月」ではなく、「制度変革の年月」だったと感じます。制度はひとつだけが大胆に変わることはできません。なぜなら、他の仕組みとの齟齬が生まれるからです。したがって、変化は時間をかけて、多方面に及んだとき、初めて実感できるものになります。じっさいに現実上、社会の中でバランスをとりながら、しかし、着実に多方面で世界が変わりつつあるのです。あれだけ変わらないと思われていた政治の世界も、地方の利益誘導型の政治から理念を立てて議論し合う政治へと変革を遂げつつあります。若い感性がこの制度変革をどのように自分の将来設計の中で受け止めていこうとしているのか、見守っていきたいと思います。今年もお互い頑張りましょう。



北沢教授、ドッグヤード再生を語る (日本経済新聞・1月13日付)

横浜みなとみらい21「ドッグヤード・ガーデン」の保存再生の経緯について「産業遺産 都市と生きる ◇横浜で保存・活用を推進、新たな文化の創造めざす」と題しての8段にわたった記事。■■■「中高時代を過ごした横浜への愛着」から横浜市へ就職、「横浜の個性を磨き上げ、そこに「都市の文化」が生まれていくようにすることが私の目標だった」。「創造都市構想」委員会座長として、「歴史空間が持つ力、新しい文化や芸術を刺激し創造的産業を生み出す力に着目し、埠頭地区の倉庫群などの近代遺産を活用するナショナルアートパーク計画を進めている。」■■■

新春第9～10回研究室会議 修論ラストパートの新春は、研究室会議も1月10日に第9

回、1日おいて12日に第10回とあわただしく開かれ、主力のM2は真剣そのもの、M1の発表も熱を帯びてきた。第6回の研究発表者は、M2伊藤晃久、黒瀬武史、金宗範、M1江口久美、鈴木智香子、第7回はM2大谷剛弘、阪口玲磨、内山隆史、田辺康弘、戸田惣一郎だった。

◆4年生インタビュー◆<第6回>進藤さん

生まれも育ちも今の住まいも東京の西側、武蔵野台地の上です。都市に関する話題を広く知りたい、と都市工へ。都市デザインの現場・第一線で活躍する方々がいる恵まれた環境に憧れて、デザイン研を選びました。卒業研究では、コミュニティガーデン

を中心とした地区の計画を作っています。大学院は、柏・新領域の環境学専攻・自然環境コースへ進みます。自然環境評価学を専門とすることとなります。都市工で学んだ視点と環境・生態の視点を加えたデザインをめざして、学んでゆくつもりです。

編集後記 都市デザイン研マガジン元旦号を飾った西村・北沢両教授対談と本号の西村教授単独会見は、研究室の新しい胎動の渦巻き解明を院生M1の坂内編集部員が提案・実現した壮挙だった。かつて都市工40年史編纂の動きがあったが、将来、都市デザイン研究室何年史かが編まれるときに、硬軟両サイドの報道をつづける本誌は、かけがえのない資料となろう。手元に高山英華著『私の都市工学』など都市工史の資料はあるものの少なく、本誌の使命は大きい。(酒井)